（第3種郵便物認可）

おおばあちゃん 心の中に

「看取り」テーマの写真絵本

写真家・國森康弘さん 子どもに命の尊さ 伝える

人の死や看取りの現場を見つめた「いのちつぐ『みとりびと』」（農山漁村文化協会、全4巻）が刊行された。写真と短い文で絵本風に構成し、核家族化で死を間近に感じる経験の少ない子どもらに「命には限りがあり、だからこそ尊い」というメッセージを伝えている。（中舘聡子）

手がけたのは、大津市在住の写真家・ジャーナリストの國森康弘さん(37)。住民の約半数が高齢者という滋賀県東近江市の農村部などを舞台に、初めて家族の死に触れた小学5年生の女の子・恋ちゃんや、同市で在宅医療に取り組む花戸貴司医師らを主人公に、それぞれが死と向き合う姿をとらえている。

制作のきっかけは、イラクやソマリアといった紛争地や東日本大震災の被災地で、膨大な「天寿を全うできなかった死」に接した経験だった。その一方、国内では病院で亡くなる人が約8割を占めるなど、死に触れる機会が減っている。國森さんは「天寿を全うすることのあたたかさを、多くの人たちに伝えたい」と考え、一昨年秋から花戸さんに同行。家族の了承を得て撮影を重ねた。

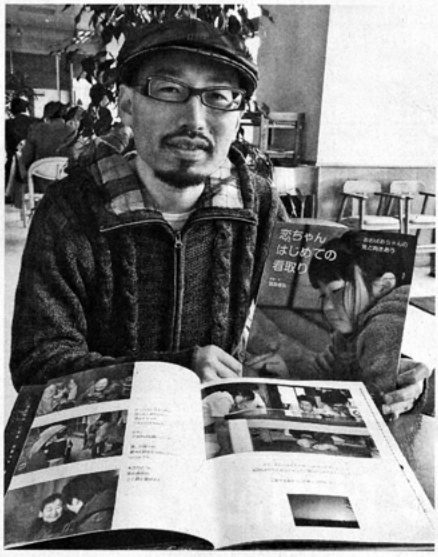
第1巻「恋ちゃんはじめての看取り」では、恋ちゃんが、92歳で息をひきとった曽祖母「おおばあちゃん」の亡きがらに触れ、ひつぎに入れる品を母親と一緒に探す様子を丹念にカメラで追った。

曽祖母の穏やかな死に顔に、涙の中に笑顔をのぞかせる親戚たちの様子も収録。恋ちゃんが、おおばあちゃんは心の中で生き続けると感じるまでを描く。

「自宅で最期を迎えたい」という希望をかなえた一人暮らしの女性が登場する、第2巻「月になったナミばあちゃん」、花戸さんに密着した第3巻「白衣をぬいだドクター花戸」と続き、第4巻「いのちのバトンを受けとって」では、身内を見送った9組の家族を取り上げた。

國森さんは「命の終わりを直視する場面も多く、ショックを受ける子もいるかもしれない。でも、死は生の大切な一部であり、忌み嫌うものではないと知ってほしい」と話し、大切な人が亡くなる時にどう見送るか、自分はどんな旅立ちを迎えたいのかを考えてみることを勧めている。

AB判。各1800円（税別）。問い合わせは同協会（03・3585・1141）。



「看取りは、旅立つ人から生き抜く力や愛情を受け取るための大切な作業だということを知ってほしい」と話す國森さん

50代主婦。同じ50代の夫は酒もたばこもやらず、家族のために身を粉にして働き、私と娘、ペットの犬を愛してくれます。でも、人としてどうしても許せないところがあります。折

夫 許せない

使わ
は
参
た
干
倒
私
の